

主 題：あざけられた救い主

聖書箇所：マルコの福音書 15 章 1 節～20 節

前回、私たちはイエス・キリストが不当な裁判をユダヤ教のリーダーたちから受けた話を見ました。しかし、彼らには、このイエスを死刑にする権限はありませんでした。そこで、その権限を持っているローマ人の裁判官——異邦人のところにイエスを連れて行きます。

(1) ピラトによる裁き (1～5 節)

ピラトはローマ帝国からユダヤを治めるために遣わされた第 5 代ローマ総督です。特別なことがない限り、彼は地中海に面したカイザリヤに駐在していましたが、この時、過ぎ越しの祭りを祝うためにエルサレムへ来ていました。

ルカの福音書 23 章 2～3 節を見ると、祭司長や律法学者たちは、ピラトに対して、イエスは国民を惑わして、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王、キリストだと言っていると訴え出しました。しかし、大祭司による裁きを思い出してみると、大祭司は、「あなたは神の子キリストですか」と問いかけました。つまりイエスに対して、あなたは神なのかと質問したのです。それに対してイエスが「そうだ」とおっしゃったので、大祭司は衣を引き裂いて、「何という神様に対する冒_だろう」と言って、イエスは死刑に値すると言ったのです。

ところがピラトのもとでは、祭司長たちはローマ皇帝を引き合いに出して訴えました。

実はここに、巧妙な策略が見てとれるのです。このリーダーたちは、「彼が自分は救世主だと言った」と言っても、ピラトは取り合わないことを知っているのです。ピラトが彼を有罪にするためには、ローマに盾突いているということをはっきりとしないといけなかったのです。だから、イエスは自分を王だと主張して、ローマ皇帝に反逆する者だと裁判官に訴えているのです。だからピラトは、イエスに関する訴えを聞いた中で、「あなたはユダヤ人の王ですか。」と尋ね、その点だけに興味を持ったのです。

ところが、ピラトが「あなたは王ですか」と質問した時に、イエス様は「そうだ」とお答えになって、そのことを否定しなかった。それなのに、なぜピラトはその時点で彼を有罪にしなかったのか。祭司長たちが言っている「王」という意味と、イエス様ご自身が言っている意味とが違うことをイエス様はピラトに告げています。(ヨハネの福音書 18 章 33～36 節) イエス様はここで、私は王だけれども、ローマが支配している地上の王国ではなくて私の王国は別だとお話になりました。ピラトはその話をよく理解していましたから、たとえイエス様が自分は王だとおっしゃっても、ローマ政府を打ち倒して新しい王国を築くという意味で「王」と言ったのではないことをちゃんとわかっていたのです。イエスはローマ皇帝にとって何の脅威もない、彼には死刑に値する罪はないということを彼自身判断するのです。

(2) ヘロデによる裁き (ルカ 23 章 7～12 節)

そこで、イエス・キリストがガリラヤの方から来たということを知ったピラトは、自分で裁きの結論を出さずに、ガリラヤ地方の国主であるヘロデのところにイエスを送るのです。ヘロデ・アンティパス——ヘロデ大王の第 4 の妻の息子です。この当時、彼もエルサレムに来ていたのです。エルサレムの町の西側にヘロデの宮殿がありました。彼はガリラヤでのイエス様のさまざまうわさを聞いて、イエスの奇跡を見たいと思っていたので、イエス様に非常に会いたがっていましたが、イエスを信じたいとは思っていませんでした。そして、イエスが何もしなかったから、イエスを侮辱した上で、もう一度ピラトのところに送り返すのです。

(3) ピラトによる二度目の裁き (15 章 6～15 節)

過ぎ越しの祭りの時は、1 人の囚人が釈放されるのが決まりとなっていました。そしてその当時、バラバという人物を釈放してもらいたいという要求を裁判官に出すために、ある人々がエルサレムに来ていたのです。バラバはローマ支配からの解放を武力で実行しようとしていた人でした。ローマからの解放こそがユダヤ人たちにとって長年の望みでした。ですからバラバという人物はある人々にとってはヒーローであったはずですが、祭司長たちはそれをうまく利用したのです。

そんな中でピラトは何とかしてイエスを釈放しようとしていました。それには 2 つの理由がありました。1 つ目は、彼はユダヤ人のリーダーに悪い思いを持っていたからです。ピラトは、訴えに来ていた祭司長たちや律法学者を無視して、群衆に対して「もし、あなたたち群衆が望むのなら、イエス様を釈放して

あげよう」と話しかけるのです。ユダヤ人リーダーの策略を台なしにするためにイエスを釈放しようとしたのです。ピラトは祭司長たちがねたみからイエスを死刑にしようとしていることをちゃんとわかっていたのです。

もう1つの理由は、ピラトの妻が人をよこして、「イエス様にかかわり合わないでください。夕べ夢で私はあの人のことで苦しい目に遭いました。」と言って来たからです。彼女は、イエスが正しい人だとわかっていたのです。ですからピラトは何とかして、イエスを釈放しようとはしました。

しかし、祭司長たちは群衆を扇動して、何とかイエスを十字架にかけるように、殺すようにそそのかしていくのです。そして、15節、とうとうピラトはイエスを十字架にかける決断をするのです。ピラトはイエスが無実であることを知っていました。しかし、群衆は、イエスは自分が王だと言ってカエサルに逆っている。そのイエスを裁かないのなら私たちは黙っていませんよとピラトに告げるのです。もしエルサレムで暴動が起こり、群衆が皇帝に抗議したら、自分の地位まで危うくなってしまうということで、ピラトは群衆の声に従うのです。ピラトは正義よりも政治的得策を選択したのです。

(4) ローマの兵隊たちによるあざけり (16~20節)

恐らくこの箇所で行われている場所は、アントニヤの要塞であろうと言われています。ここは四つの塔で囲まれていました。その3つの塔の高さは21メートル。南東の塔だけがなくて30メートルあったのです。その塔から神殿の聖域がよく見えました。エルサレムで暴動が起こらないように、そこにローマ兵がいたのです。

16節に、ここに600人の全部隊を集めたとあります。これだけの兵士が常にピラトとともに行動したのです。彼らはイエス様のことを全然知りませんでした。しかし、彼らは、イエスがユダヤ人の王ということで裁かれていることを知っていました。ですから、紫の衣を着せ、いばらの冠をかぶらせ、右手に王位の象徴であるしゃくのかわりにあしの棒を持たせませす。マタイの福音書では、緋色の衣とあります。恐らくローマの兵隊が身につけていたマントが色あせてしまって、角度によって紫に見えたのです。紫というのは王族の色です。そのように王にふさわしい格好をさせ、「ユダヤ人の王様、万歳」と繰り返し叫んだり、あしの棒で頭をたたいたり、つばきをかけ、拝むという行為を何度も何度も繰り返してあざけったのです。おまえが王だったら、おまえの兵士はどこにいるのかとイエスをばかにしたのです。ヨハネの19章を見ますと、4名の兵士がイエスを連行したのを見ることができます。このローマの兵隊たちがイエスに個人的に恨みを持っていたわけではありません。ここには、王を待っていたユダヤ人に対する軽蔑がありました。

ローマの兵隊たちはイエスが誰かを知らなかった。イエス様が帰ってくる時には、あしの棒ではなくて鉄の杖を持ってくと預言されています。(黙示19章15節、詩篇2篇) イエスに逆らい続けたすべての人々を滅ぼされるとあります。確かに、イエス様が十字架にお架かりになっている時、人々はそこに弱さを見ました。人々のなす悪行に対して何もなさない。しかし、この方はまことの裁き主で、間違いなく後に鉄の杖を持って、ご自分こそが唯一の裁き主であることを世に明らかにされるのです。黙示録の中に、その着物にも「王の王、主の主」と書かれていたとあります。これがこのイエスの名前です。どんなに力を持っている皇帝であっても、この方に勝る方はいないということをヨハネは明言するのです。

そしてローマの兵隊たちはイエスをあざけるために、イエスにいばらの冠をかぶせました。いばらというのは、創世記3章で罪の結果、地から生えてきたものです。何とイエスの上に人間の罪の呪いが載せられたのです。そしてイエスはそれをかぶってあなたの身代わりに死んで行かれたのです。イエスは裁き主です。イエスは王です。そしてイエスは救い主です。しかし、悲しいことに、彼らの心は閉ざされていて、神に対して罪を犯しながら罪悪感も持っていない。彼らは真理を知ろうとしない。自分の愚かさもわからずにいたのです。

詩篇の2篇4節に「天の御座についておられる方を笑う。主はその者どもをあざけられる」とあります。人々はイエス様を笑ったのです。しかし、その様子を見ていらっしゃる神様は、愚かな罪人を見て彼らをあざけるといいます。私たちの愚かさを見て、私たちに警告を下さっているのです。

今朝、十字架の前の裁きの様子を見てきました。イエス様は常に自分が救い主であることを主張してこられました。でも彼らはそれを信じずにイエスを十字架にかけたのです。クリスチャンである皆さん、すばらしい神様です。すべてのことが私たちにすごいメッセージを語ってくれるのです。なぜイエスが死んだのか、この方が私たちの誇りです。希望です。なぜならこの方だけが王であり、裁き主であり、救い主だからです。